

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	若者ことばについて
Author(s)	沈, 恵芬
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 22期 : 105 - 118
Issue Date	2008-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038823">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038823</a>
Right	
Relation	



# 若者ことばについて

沈 惠芬 (シン・ケイフン)

## はじめに

若者ことばについて考察するきっかけになったのは、日本人の若者同士が非常に楽しそうに会話を交わしている時、その会話の中に私に通じないことばがよく出てくることに気づいたからである。日本人に質問することによって、やっと分かるようになった。それは彼ら自分が作ったことばで、いわゆる「若者ことば」というものだとか。「フルコマ」や「チャイゴ」、「セブンル」など、今は誰でも分かっており、よく使うような言葉にもなっているかもしれないが、最初に教えてもらわないと理解できないものである。教科書で教える堅苦しそうに感じられる言葉と違って、聞いたりその意味を探ってみたりすることが、なんだか目新しい感じを与えてくるような気がする。なかなか面白く思われて、インターネットで調べてみたら、若者が勝手に作り出した、日本語を乱している、問題な日本語だとかという批判がある一方、新たな造語法により、日本語を豊かにしたり、会話のテンポをよくし、仲間意識を強めたりするに役立つというような積極的な見方もあることが分かった。興味深いものであると同時に、難解なところもあるようで、このテーマについてもっと詳しく調べることにした。日本語のレベルの向上及び一層深く日本文化への理解を目標に、考察を行っていきたい。

## 第1章 定義と特徴

若者ことばというのは、年齢層からすると、主として10代前半から30歳前後の男女に使われており、一般的に国語辞書には載っておらず、いわば俗語としても扱われる、一つ一つの集団や、仲間同士などに限って通じることばや単語、言い回しのことをさす。仲間内で、会話促進・娯楽・連帯・イメージ伝達・隠蔽・緩衝・浄化などのために使う、規範からの自由と遊びがその特徴である。また、時代によって違って来る。若者語ともいう。

その特徴についてすこし説明すると、

### ① 仲間内で使うこと

ヨソ者、つまりまったくの他人は当然のこと、名前を知っている人でも仲間意識がない人々に対しては使わない。そこから、ヨソ者には何を言っているのか分からない隠語めいた語に聞こえる。そこで、若者言葉がしばしばよそ者に訳の分からない変な言葉だと批判されている。

### ② 会話促進・娯楽・連帯・イメージ伝達・隠蔽・緩衝・浄化などのために使う

これは若者ことばの使用の目的と其れの果たす機能から見た特徴である。会話のノリを

楽しむために語を省略したり、倒置したりして、新しい語形を作り出し、また本来の意味を変えて別の新しい意味で使用し、さらに今までにない新しい用法をして見せる。

### ③ 規範からの自由と遊び

近代化によって、個人の解放・自由を追求し続けた結果、現在、個人の自由は行き着く所まで来た感があるが、とりわけ若者は最も先鋭的に個人の自由を主張しており、服装、持ち物、考え、行動、ことばのどの面を見ても従来の規範から自由である。其中でことばの規範から自由に、悪く言えば勝手に新たな語を作り出し、新たな意味と用法で使っているのが若者ことばと言える。

## 第2章 できた時代背景ときっかけ

若者ことばはある特定の時代に急に生まれ出したわけではなく、いずれの時代にも存在している。それぞれの時代背景に応じて、様々な若者ことばが生まれるわけである。そのため、特定の時代を定めないと若者ことばというもののできるきっかけや特徴などに関するすべてが考察しにくくなる。それらを考えたうえで、本レポートでは明治時代から今までの若者ことばを考察の対象にすることにした。

以下、若者ことばが生まれる社会的要因を、米川明彦氏の『現代若者ことば考』に書かれてあることを参考しながら簡単にまとめた。

日本において若者文化が形成されたのは一九六〇年代である。高度経済成長を背景に六五年には高校進学率が七〇%になり、大学生が百万人を突破したことがその大きな要因である。

六十年代から七〇年代にかけて「青年」という語が使われ、青年文化論が盛んに展開された。次いで七〇年代から八〇年代にかけて「青年」に代わって「若者」の語が使われるようになり、新たな若者文化論が展開された。七〇年代後半の「モラトリアム人間」、八〇年代前半の「新人類」、「メディア人間」、八〇年代後半カラ九〇年代にかけての「おたく」などがどの代表例である。

### 1. 「まじめ」の崩壊

七〇年代前半まで続いた高度経済成長期の日本社会では「まじめ」、「努力」、「汗」、「能率」が価値基準として高い地位を占めていたが、七〇年代後半から、豊かになったことで目標を喪失し、豊かさを楽しむ高度消費社会へと変化していった。そこでは先の「まじめ」が軽蔑され、今では「マジ」という若者語になってしまった。経済成長期はスポーツ根性（スポコン）物のマンガ『巨人の星』がはやったが、八〇年代以後、スポコン物ははやらず、軽いノリでふざけた面白さを持つ自分と等身大の主人公に人気移った。こうして日本社会は楽しむことを第一とするようになった。このような緩んだ社会は消費を謳歌するのと相まって、ことばに縛られるのではなく、娯楽の手段としてことばを遊ぶようになった。ここに若者ことばがそれ以前に増やして会話をより楽しむために、より自由に、より

多く生産されるようになっていたのである。若者ことば——「ノリ」の会話はまさに日本の高度経済成長期の所産なのである。

## 2. 高度消費社会

八〇年代、若い女性がマーケットのターゲットとなり、時代のトレンドを握るようになったといわれる。そこで、女性達の消費傾向と若者ことばとを結びつけて考えると、八〇年代はブランド物が流行し、次のようなことばが使われた。

イタモン：イタリア製の服飾品

イタメシ：イタリア料理

イタカジ：イタリアンカジュアル

シャネラー：「シャネル」でコーディネートした女性

## 3. ボーダーレス社会

高度成長によって日本は高度成長社会となり、それまで支えられて来た男性の価値観は否定される方向に向かっている。七〇年代から八〇年代にかけてボーダーレス社会になった日本は、男女の性的規範も崩れユニセックス化しており、若者ことばにおいては女性が男性を品定めをして表す時代となった。こういうことばが使われた。

アバウト君：いい加減な男性

キープ君：結婚相手の本命が見つかるまでキープしておく男性

パセリ君：売れ残りの男性

ギャル男：ギャルのような男性

ゲロ男：不細工な男性

ケミ男：ケミカルウォッシュのジーンズをはいているダサイ男性

また、一九八六年四月に男女雇用機会均等法が施行され、総合職につく女性に関わるOL用語が生まれた。

寝たきりOL：残業続きでくたくたになり帰ったら寝るだけのOL

自由流通OL：能力を持っているためいつでも転職できるOL

バリキャリア：バリバリ働くキャリアウーマン

エレキャリア：エレガントなキャリアウーマン

## 4. 高度情報社会

若い女性の中にポケットベル（ポケベル）が流行している。このようなポケベルの流行から、女子高生達はポケベルに関する新語を造っている。

いたベル：いたずらポケベルの略

からベル：ポケベルにメッセージが入っていないこと

- ベル友：ポケベルだけの友達
- ベル番：ポケベルの番号
- ブルってる：ポケベルが振動してかかってきたことを知らせる

## 5. サービス社会

サービス化が進んだ日本社会では、ファーストフードやコンビニが若者の間人気があり、それらの名称が略されたり、動詞化されたり、比喩化だれて使われている。

- マック：マクドナルド。関東で使う。
- マクド：マクドナルド。関西で使う。
- ミスド：ミスタードーナツ
- ファミマ：ファミリーマート
- マクる：マクドナルドに行く
- ファミる：ファミリーマートに行く
- ロソる：ローソンに行く。「ローソる」とも。
- 人間ローソン：休みなしに働いている人

## 6. おしゃべり社会

現代はおしゃべり文化の時代である。おしゃべりはおしゃべりすること自体に意味があり、楽しみがある。若者達はこのおしゃべりの時代にもっとも過激にことばを造語し、用法を変え、意味を変えておしゃべりを楽しんでいる。まさに会話の「ノリ」を楽しんでいるのである。また、大げさな表現、強調する表現、新奇な比喩表現を使って笑いをねらった会話をしている。

例えば、強調表現には、「めっちゃ」「めちゃくちゃ」「すごい」「超」「激」「バリ」「メッサ」「鬼」「スーパー」「マックス」などがある。

## 第3章 若者ことばについての批判

規範とされる国語・標準語からずれている若者ことばが日本語の乱れだと批判する人が少なくない。主として意味不明や文法、敬語などの表現に関するものが批判の対象とされる。また、自由を追求し、会話の「ノリ」を楽しむために使われる若者ことばは日本語の乏しさの現れだという声も聞こえてくる。

まず、ここで「乱れ」とは何なのだろうかを見てみよう。ウィキペディアによると、「日本語の乱れ」とは、規範とされる日本語（標準語）（国語）と現実の日本語の食い違いを否定的に捉えた語であるという。それでは、「乱れ」と見なされる理由をいくつか見てみよう。

### 1. 理解できない

若者のしゃべりに耳を傾けてみたとしても、何をしゃべっているのか分からない。例え

ば：

ってユーカー、この前ゴーコン行ったんだけどさー、イケメン期待してたら、マジありえないブタメシそろえやがって、ホント死んだワー、てか、むしろチョー、テンパッたー。しかもケイバンとか聞かれてー、スで無理なんだけどー。

いきなりこういう話を聞かされて、よそ者で聞き取れる人は恐らくいないだろう。

「ブタメシ」：

「イケメン」の反対で、「ブサメン」（不細工な男）、「シケメン」（シケてる男）などの内の、とにかく「ブサメン」の「ブサ」に「ブタ」の響きが重なり、「メン」に「メシ」の字面が重なって、さらに BSE 問題で登場してきた「豚丼」「豚飯」がかぶっていると。

「テンパる」：

せっぱ詰まって緊張の極にあることを示している。麻雀のあと一枚の牌がそろえば上がりという状態の「聴牌」からきているということだ。

「ケイバン」：

携帯電話の番号

「ス」：

「素」であって、「そのまま」「ダイレクトに言って」「なんら考えずとも」というような意味になる。

こうした若者のお喋りに出てきた「ブタメシ」「テンパッたー」「ケイバン」「ス」のようなことばはどういう意味か、その語源や発生のプロセスなどを説明しないとヨソ者にはさっぱり見当がつかないため、彼らに「訳の分からないことば」として扱われるのも仕方なさそうなものだ。

## 2. 文法に従わない

規範とされる従来の標準語の文法に反する使い方の中で、「ラ抜き言葉」と「全然」の使い方がよく取り上げられている。

「ラ抜き言葉」：文法によると、「書ける」のような「可能動詞」を作ることができるのは「五段活用」する動詞だけで、「食べる」のような「下一段活用」する動詞や「見る」のような「上一段活用」する動詞は、助動詞「られる」を使って「食べられる」「見られる」としなければならないことになっている。そこで、「食べることができる」の意味での「食べれる」のように「ラ」を落としてから使う、いわゆる「ラ抜き」というのは文法上のひずみで、文法的に誤っているのだと指摘される。

「全然」：「全然～ない」などと後ろに否定や打ち消しを伴うのが正しいとされる「全然」は、若者達の手によって、「全然大丈夫」「全然平気」「全然 OK」「全然楽しかった」のような使い方が作り出された。言うまでもなく、規範に反するものだと見られる。

## 3. 若者流の敬語表現に違和感がある

よく耳にするのは下降調で言う「私って、〇〇が好きじゃないですか。」というのがある。自分の意見をことさら強調して押しつけがましく思われる可能性があるとは指摘される。

#### 4. 語尾上げ（半疑問イントネーションがおかしい）がおかしい

最近このような話がよく聞こえる。「このホームページ？の管理人？彼の名前？は山戦士？だと思っ」とか。このように言葉の最後を問いかけるふうに上げて話すことを語尾上げという。こうした話し方が蔓延するのは現代人の自信の無さの現れだと言われる。つまり、自分の意見を断定的に言った時に予想される反発を緩和させるため、或は使う言葉に疑問形をつけることで相手の様子を判断し、自らの引き際を定めたいとの思惑があるようだということ否定されている。

（とかとか、みたい、感じ、状態、モード、微妙など）

#### 5. 語彙が貧困だ

会話のノリのよさを求める若者達が、言葉を交わす時に、早く相手の話に反応ができるように、さほど思考せずに、直接「マジ」「チョー」「バリ」などを連発しながら、何事も「スゴイ」「カワイイ」「ムカツク」といったような単純な言葉で一括にして済める。いかにも語彙量が乏しく思われそうだ。

以上、批判者による批判する主な理由を五つ挙げた。それらを通して、若者ことばはなぜ批判されるかが分かった。

### 第4章 若者ことばについての肯定評価

若者ことばは第三章でまとめたように「おかしいことば」と言われ続けてきている一方、「決してくだらない、間違ったことば」ではないというふうにも考えられる。文法上ではちゃんとした造語法が見られ、コミュニケーション効果では会話をスムーズに運んだり、仲間意識を強めたりするような機能があるという。さらに、こんな耳新しいことばの出現の背後ではたらくメカニズムや日本語変化の大きな流れが見えてくるという新たな見方も最近よく耳にするようになってきた。筆者もこちらの見方に傾いている。さて、以下に若者ことばに肯定的な評価を与える証拠をいくつか見ていこう。

#### （一） ちゃんとした造語法が見出せる：

意味不明に見える若者ことばは実際ちゃんとした造語法がある。大きく分けて、既存の語とは無関係な新語を造語する方法と、既存の語を利用して新語を造語する方法の二つに分類される。以下は、米川明彦の『現代若者ことば』を参照しながら、まとめたものだ。

##### 1. 既存の語と無関係な新語の造語：

全く新しい語を造るもので、マンガなどの擬音語・擬態語・擬声語などによく見られるが、若者ことばでは次のような語がある。

ゲロゲロ：嫌な感じがする時発する語

例) A：あした哲学休講やろ？

B：えっ？あれ取り消しになってたよ。

A：うっそー、ゲロゲロ！

ルンルン：心が弾む時に言う語

ウルウル：悲しいさま。涙が出るさま。

ギンギン：力がみなぎっているさま。

ギョエー：気持ち悪い時やびっくりした時に発する語

このような擬音語・擬態語などの造語は既存の語を無視して造られた。こうした音を繰り返すことによってリズムカルになり、面白さが出る。

## 2. 既存の語を利用して新語の造語

1) **借用**：外国語から借用することが多い。本来の意味が変えられて、遊びの精神から生まれた語が多い。

アウト：だめ。ダサイ。「オフ」とも言う。

アメリカン：アメリカンコーヒーが薄いことから、頭髮の薄いこと。また、話などの中身がないこと。

カセット：録音用カセットテープは「音入れ」だから「おトイレ」の意。

クリスマスケーキ：二十四日を過ぎるとクリスマスケーキが売れなくなることから、二十四歳を過ぎても結婚しないでいる女性を指す。

マックス：とても、非常に。「マック」とも。

デビュー：今までダサかった人が、おしゃれになってあか抜けすること。または悪いことを始めること。

例) A：○○って知ってる？

B：同じ高校だったけど、話したことない。暗かったし。

A：え、おしゃれで面白い人でしょ。

B：ウソ、じゃ大学デビューなのかな。

2) **省略**：語句の一部を省略する方法である。この省略にも色々な種類がある。

a.上略：単語の上部を省略したため、元の語形が分かりにくいため秘密保持のための



犯罪者隠語によく見られる方法である。一般語には無く、若者語には次のような例があるが、俗っぽく、また不良っぽく聞こえる。( ) 内が省略された部分。

(ハイ) ヒール  
(サラ) リーマン  
(喫) 茶店  
(ケンタッキーフライ) ドチキン  
(その) まんま  
(ス) マップ  
(使い) 走り……ぱしり

例) A:なあ、ジュース買ってきて。

B:私にあんたのぱしりか?!

b.中略：単語の途中を省略したもの。数は少なく、形容詞が多い。

きも (ち悪) い  
はず (かし) い  
むず (かし) い  
うっと (うし) い  
はげ (はげし) い  
フラ (ンス) 語

c.下略：単語の下部を省略したもので、省略語の中で最も多く、四割以上を占める。省略されても、元の語が分かりやすいので普及している。そして、省略されて三拍になることが多い。

キャラ (クター)  
ケンタ (ッキーフライドキッチン)  
マクド (ナルド)  
なにげ (なく)  
ごち (そう)  
おそろ (い)  
お気に (入り)  
うれし (がり)  
色ち (がい)

d.複合語の各要素の下部を省略

各要素を省略して二拍+二拍、計四拍とすることが多い。省略の中でも数の多いものがある。

かて (い) 教 (師)  
スノ (ー) ボ (ード)  
カラ (ー) コン (パクト)

追い (出し) コン (パ)

一 (方) 通 (行)

いた (ずら) 電 (話)

### 3. 動詞の派生——“る”ことば

「る」をつけた派生動詞は「タクシーに乗る」を「タクる」、「コピーをとる」を「コピーる」というように述語動詞を「る」で代行させて短く簡潔に表すことで会話のテンポを良くしており、会話測深に一役買っている。中でも、コンビニやファーストフード店に行くことを表す語が多い。

マクる：マクドナルドに行く

ローソる：ローソンへ行く

オケる：カラオケへ行く

デニる：デニーズで食事する

タコる：たこ焼きを食べる

たばる：タバコを吸う

コンパる：コンパをする

トラブる：トラブルが起きる

パニクる：頭がパニックになる

ウニる：頭がウニのごちゃごちゃになる

ブタる：太る

がきる：ガキのようなことをする

馬耳る：馬耳東風から、人の言うことを聞かない

### 4. 形容詞・形容動詞の派生

これには活用する接尾語「い」「っぽい」をつけて形容詞を造る方法と、英語の接尾語「チック」「フル」「レス」をつけて形容動詞を造る方法とがある。「チック」はどんな語にも付きやすく、造語しやすいが、「フル」「レス」は臨時的で、例は少ない。

今い：当世風のさま

いもい：田舎っぺのようなさま

水っぽい：水商売風のさま

アホっぽい：アホであるようなさま

ヤバチック：少しヤバイ

変チック：少し変

羞恥フル：羞恥心があるさま

元気レス：元気がないさま

バスレス：スクールバスに乗ろうと思った時間にバスがないさま

根拠レス：根拠がないさま

その他、「てるてる言葉」というのもある。例えば「ゴリってる」はゴリラのような顔のさまを言う。この形式は動詞であるが、意味的には形容詞である。主体の状態、様子を描写したもので、在来の形容詞の不足を補う造語法になっている。

ウルフってる：「一人狼」から。一人ほかと違ったことをしている

きょどってる：挙動不審の様子である

つちってる：化粧していないこと。疲れがたまって顔色が悪いこと

ロリってる：大学生位の女の子が小学生風の可愛い格好をするさま

オニってる：激しくする。ひどいことする。

例) A:昨日の朝七時から晩十時までずっとバイトやっててん。

B:それはかなりオニってるわ。

## 5. 動詞の複合

「する」をつけてサ変動詞を造る方法である。この造語法は本来、動きを表す運動性の意味を持つ名詞に付くが、若者ことばでは人に関する語を始め、運動性の意味を持たない名詞にも付く。これは上にくる名詞のイメージがはっきりしている場合である。従って、イメージ伝達機能を果たす。

お茶する：喫茶店へ行く

大人する：めかす

おばさんする：中年のおばさんのような言動をする

女子大生する：ミーハーっぽく騒いで遊び回る

マルシアする：変な日本語を使う

## 6. 名詞の複合：

主体の状態を表している。

与謝野晶子状態：髪が乱れている

空腹状態：お腹がすいている

おやじ状態：おやじのようなさま

クラゲ状態：暑くてだれたさま

勉強モード：勉強している

以上、よく見かける若者ことばの造語法を分類してまとめた。

検証してみると、若者ことばは一般語と違い、造語法がかなり豊富であり、ユーモアを含んでいるということに気付く。この豊富な造語法によって作り出された若者ことばは現代日本語を乱しているというより、日本語をカラフルにしていると言ったほうが適切なのではないだろうか。古くから、日本人が語尾の付き替えによって品詞を転換したものが無

数にある。例えば、「明るい／明かり／明らか」「群れる／村」「欠ける／欠片（かけら）」「白／白い」のような語がある。また、近くの「サボる」は「サボタージュ」を省略して、「る」をつけてできたもので、今現在全く違和感を感じずに使われている。仮にこのような造語法を誤りとして排除してしまうとしたら、日本語の語彙は非常に乏しいものになってしまうだろう。これからの日本語の美しさを守るどころか、かえって日本語の造語力を低下させ、本当の日本語の貧困化を招くのでは。

## (二)「ラ抜き言葉」により「意味明晰化」「動詞活用単純化」の実現

「文法的に誤っている」「日本語が乱れている」例として常に取り上げられている「ラ抜き言葉」に関して、井上史雄氏の『日本語ウオッチング』においてその広まった理由について新たな意見を述べた。以下、井上氏の観点をまとめてみた。

### 1. 意味の「明晰化」が実現できる

従来、助動詞「られる」には、受け身と尊敬、可能、自発との4つの意味がある。だから、「見られる」とか「食べられる」とかという言葉を開いたり読んだりした時、その4つの中のどの意味になるのかを文脈から判断しなければならない。例えば：

「彼は熊に食べられた」→受け身

「先生はそのお菓子を食べられた」→尊敬

「私は納豆を食べられる」→可能

「私には、それは正しいことのように思われる」→自発

しかし、曖昧になってしまう恐れもある。例えば、「先生はその料理を全部は食べられなかった」の場合では、尊敬の表現か可能の表現か判断がつかかぬ。一方、「ラ抜き言葉」を使うと、可能の意味はもっぱら「ラ抜き言葉」で表現し、尊敬の意味は相変わらず「られる」で表現するので、曖昧さが丸ごと吹っ飛ばされるのである。つまり、上の例そのままだとすれば、尊敬の意味になり、可能の意味を表したいなら「先生はその料理を全部食べられなかった」になるわけだ。こうして、可能と尊敬の意味の明晰化が実現できたわけである。

### 2. 動詞活用の「単純化」ができる

日本語の動詞の可能形にはいくつかの活用パターンがある。例えば、五段動詞の「読む」は「読める」になり、一段動詞の「見る」は「見られる」になることになっている。しかし、もし「ラ抜き言葉」を使えば、「見られる」は「見れる」になって、可能の形が「読める」とそろうことになる。つまり、一段動詞と五段動詞の可能の形が同じようになることだ(図1)。これはカ変動詞の「来る」(最近「来る」の可能形も「来れる」になったようだが)とサ変動詞の「する」以外の全ての動詞に当てはまるので、動詞活用が単純になるわけだ。

図 1

	読む	見る
終止形	yom-u	mir-u
受け身・可能	yom-ar-eru	mir-ar-eru
新しい可能形	yom-eru	mir-eru

図が示したように、「来る」と「する」以外の全ての動詞の可能形は終止形「-u」の代わりに「-eru」をつければ良い。分かりやすいし覚えやすい。

また、動詞の簡略化はかなり昔からあったものである。例えば「読む」の可能形はもとも「読まれる」だったが、平安時代から続く動詞の簡略化の流れを受けて、室町時代に「読める」になったのだ。そして、この表現が徐々に他の動詞に広まって、最近に至って「見られる」が「見れる」になったわけだ。同じ動詞の変化にも関わらず批判するのは納得しかねる。それは動詞活用の整備で、文法の更新であると考えたほうが適切だと思われる。

### (三) コミュニケーション効果

現代の若者ことばは会話の娯楽や会話促進などのための手段として、一言で言えば会話の「ノリ」を楽しむ手段として使用されている。そこで、コミュニケーションにおける多くの機能が見られる。

#### 1. 会話が楽しくなる

若者は会話を面白くするために、面白い話題を選択するだけではなく、面白い言葉を造り、使って楽しんでいる。

ピッコロ大魔王：飲み会で飲み過ぎて吐いてしまうこと。『ドラゴンボール』というアニメに出てくるキャラクター名で、自分の分身を口から出す時、とても激しい顔をするところから。

会話の中で、「昨日吐いちゃった。すごかったよ」というふうに眉をしかめながら淡々と語るよりも、「ピッコロ大魔王」一言で自分の吐く時の激しさをありありと表現するのが面白い。他に「クラゲ状態」「馬耳る」などようなことばも場合によって使われる。それによって、会話が盛り上がり、楽しくなっていく。

#### 2. 連帯感が強まる

若者ことばはそもそも仲間内のことばなので、使うことによって、仲間同士に親近感を持たせ、「ウチの人間」という仲間意識を強めるわけである。それに、使えば使うほど連帯感が強化される。前に挙げた「ブタメシ」のようなことばもそういう機能が持っている。ヨソ者には通じないものの、仲間同士の間で使うことによって、代わらぬ間柄であることが確認され、さらに仲間意識が強化されている。

### 3. 緩衝に効果的

相手の感情を害したり傷つけたりするのを避けて、相手への印象を和らげる機能であり、言葉の暴力性を緩和する働きである。近年、若者は、他者と深く付き合うと傷つけられることになりはしないかと恐れ、人とあまり関わろうとしないと言われる。自分が傷つけられるのを避けるために、他者に対する批判的な言葉は言い換えてやわらかくしている。こういう意味での若者のやさしさ志向は本来のやさしさから程遠いが、「ノリ」の会話をしている間も傷つけられることのないように気を使っているのである。例えば、「いい加減なやつ」と面と向かって言うと相手は腹を立てるが、「アバウトなやつ」と言うとそれほどでもない。語感がずっとやわらかくなる。その他、「自己中心」と言わずに「自己中」と言い、「不器用」と言わずに「ブッキー」、「変な子」と言わずに「ヘンコ」と言うなど、いずれも冗談っぽく聞こえ、刺々しさがなくなり、言われても気まずい関係になりにくい。

また、上に触れた「語尾上げ」のような耳触りの表現も実は、コミュニケーションの上で効果的な面を持っている。それは何故かという、こういう「半クエスチョン」とか「半疑問」とかの表現を使うと、自分が話そうとしている事柄について、相手が知っているかどうかをその都度確かめることができるからだ。よどみなく、すらすらとしゃべった場合には、しゃべり終わってから相手が質問することになるのだが、この半クエスチョンを使いながらしゃべると、相手の反応を確かめながら続けることができ、お喋りを二人で作っていくという効果がある。また、この半クエスチョンは、自分がしゃべっている、使っている表現が適切かどうか、ちょっと自信がない時に、ねえ、これでいい？と相手に助けを求める時にも使える。相手が頷いたりしてくれると、安心して次に進めることができる。こうして、二人で会話を楽しむことができるわけだ。

その他、「ーって感じ」とか「ーみたいな」とかのような、断定を避ける言い方も会話をスムーズに運ぶ効果がある。

## 第5章 私の考えと収穫

若者ことばについての勉強を通して、私は若者ことばについての認識が深まったと思う。第三章に書いてあるように、若者ことばはかなり多くの面で批判を受けている。しかし、落ち着いて第四章をまとめながら、真剣に吟味してみると、私としては、本当に若者ことばが日本語を乱しているのか疑問に感じるのである。もう一度考え直す余地があるのではないかと思う。そもそも言語は生き物であるため、常に変化する性質が備わっているである。ある世代の言葉は既に、前の世代の言葉と幾分違っているものである。ある短い年月では同じ言葉を使っているが、100年200年では大きく変化するに違いない。その変化の原動力を考えてみると、恐らくこの「若者ことば」というものになるだろう。だから、日本語を乱すというより、むしろ日本語に変化を与えるというほうがふさわしいのではないだろうか。そして、もたらされた変化は決して悪いものとは限らない。例えば、前章にも

書いてあるように、「ラ抜きことば」の使用によって、「意味の明晰化」と「動詞活用の単純化」が同時に実現できたので、日本語を学ぶ外国人にとって幸いなことだし、また造語法においては数多くの耳新しい言葉が作りだし、日本語を豊かにすることもできた。確かに、「若者ことば」を理解したり、覚えたりするのは苦勞するが、でも一旦覚えて、さらに使いこなせるようになったとすれば、友達との会話が面白くなるのは勿論、ひょっとしたら自分が人に受け入れられるようになり、友達との友情関係も知らないうちに深まるのではないかと思われる。この面で、私は、「若者ことば」を楽しんで受け入れ、使っていこうではありませんかと、訴えたい

また、日本の若者はかなり空気を読めるので、服を着るのと同じように、ことばも場面によって選別すべきだということが分かると思っている。仮に、部外者に対して仲間内でしか通じない言葉を使って相手を傷つけたり、目上の方に向かって「ーじゃん」とか失礼なことを言ったり、表現すべき言語を失い、最終的に漢字仮名交じって表記したりすることになれば、それはことばの問題ではなく、家庭のしつけと国語教育現場に問題があるのではないかと思う。家庭においてきちんと子供のしつけを行って、学校で国語教育にもっと力を入れれば、このような本当の意味上の誤りが出なくなるかもしれない。

今回の「若者ことば」の考察をきっかけに、これから現代日本の若者のライフスタイルや価値観に見つけられる若者像を探っていき、さらに深く現代日本文化に触れたいと思う。

#### 参考文献：

- 米川明彦『現代若者ことば考』 丸善ライブラリー 1996/10  
米川明彦『若者ことばを科学にする』 明治書院 1998  
井上史雄『日本語ウォッチング』 岩波書店 2004/9  
北原保雄『問題な日本語』 大修館書店 2004/12  
加賀野井秀一『日本語を叱る！』 ちくま新書 2006/4  
金田一秀穂『新しい日本語の予習法』 角川書店 2003/4  
R・M・W デイクソン (大角翠 訳)『言語の興亡』 岩波書店 2001/6

#### 参考サイト：

- <http://ja.wikipedia.org/wiki/>  
[http://contest2005.thinkquest.jp/tqj2005/80019/w\\_word.html](http://contest2005.thinkquest.jp/tqj2005/80019/w_word.html)  
[http://www.athome-academy.jp/archive/literature\\_language/0000000194\\_01html](http://www.athome-academy.jp/archive/literature_language/0000000194_01html)  
<http://www.001.upp.so-net.ne.jp/ketoba/kooen6.html>